

分担研究報告書

産業保健師等の継続教育に関する研究 キャリアラダーに基づく研修モデルの構築

研究分担者	五十嵐千代・三好智美
研究協力者	松田有子
研究代表者	荒木田美香子

(産業保健分野のポピュレーションアプローチ推進手法の開発と産業保健師等の継続教育に関する研究)

厚生労働科学研究費補助金(労働安全衛生総合研究事業)
(産業保健分野のポピュレーションアプローチ推進手法の開発と産業保健師等の継続教育に関する研究)

分担研究報告書

産業保健師等の継続教育に関する研究 キャリアラダーに基づく研修モデルの構築

研究分担者 五十嵐千代 東京工科大学医療保健学部
研究分担者 三好 智美 東京工科大学医療保健学部
研究協力者 松田 有子 国際医療福祉大学小田原保健医療学部
研究代表者 荒木田美香子 国際医療福祉大学小田原保健医療学部

研究要旨:平成 25 年度に本研究班で作成した産業保健師のキャリアラダーに基づき、1 年目の新人期、5 年目のマスター期の研修モデルを構築した。いずれも 3 回の研修に分け、回の間には課題を提出し、参加者が自分たちの職場を意識しながら進めていけるように、理論と実践の両方を取り入れた。研修内容は、ポピュレーションアプローチを展開することが多い総括管理の中でも、職場組織をみる力(職場アセスメント力)を育てる点にウエイトをおいた。その結果、新人期、マスター期とも、キャリアラダーの概ね全項目において到達レベルに達していた。これらの研修をとおして、単に産業保健師の能力を育成していただくだけではなく、就業年数に応じた課題解決への意欲や組織の中での産業保健師としての役割の自覚など、就業に関する意欲を高めるものにもつながり、研修モデルとしては意義の高いものが構築されたと考える。

A. 目的

平成 21 年の保健師助産師看護師法改正では、卒後新任研修が努力義務になった。しかし、行政分野の保健師は新任教育がなされているところが多いが、産業分野の保健師は体系的にされていないところが多い。大学等での保健師の基礎教育での公衆衛生看護学では、ほとんどが行政分野の教育が主で、産業保健師としての基礎教育はほとんどなされていない。

産業保健師としての卒後教育は公益社団法人日本産業衛生学会で、約 20 年前から登録産業看護師として実施されているが、体系的なものではなかった。この度、平成 27 年 9 月より、学会認定の産業保健看護専門家制度がスタート予定であるが、そのキャリアラダーは、本研究班が平成 25 年度に作成した産業保健師のキャリアラダーを参考にして作られている。

よって、本研究班では、昨年度作成した産業

保健師のキャリアラダー（五十嵐ら, 2013）¹⁾を基に、初任期の特に新人期と5年目以上のマスター期の研修モデルを構築することとした。

産業分野においては、公益社団法人日本看護協会が10年目の産業保健師を対象とした中堅期リーダー研修を開催している。

しかし、それ以外のキャリアラダーを意識した研修会は実施されていないことから、本研究での新人期、5年目を対象とした研究モデルが新たに構築されることは、産業保健師を体系的に教育し、人材育成をおこなっていけることにつながり、その意義は大変大きい。

B. 方法

1. 研修会の概要

1) 研修会の対象

平成25年度に作成した産業保健師のキャリアラダー（以下、キャリアラダーと略す）では、キャリアの段階を初任期（1年目・新人期；以下新人期）、マスター期（5年目以上）、リーダー期（10年目以上）、エキスパート（15年目以上）の5段階に設定した。今回の研修では、採用初年度の教育は重要であるとの考えから産業保健師として新人期の者と、初任期を終え、1人前の産業保健師として業務を行えるマスター期（5年目以上）を研修会の対象とした。

研修生の人数は5~6名とした。その理由は、研修方法としてグループワーク等を多くし、各自の課題を参加者同士で検討や意見交換でき、研修会で講師が1人1人への細やかな支援を行うことができると考えたためである。

新人期の研修生募集のために、看護系大学に、平成26年3月卒業生で産業保健師として就職する者に対して研修会と参加希望者の連絡方法を周知してもらうことと、南関東圏内の主な企業に研修案内を行った。研修会参加希望者は11名であった。勤務地や業務等の関係で、実際の参加者は、5名となった。

マスター期（5年目以上）の研修生募集として南関東圏内の主な企業に研修案内を行った。研修会参加希望者は6名であった。

2) 研修会プログラム

新人期・マスター期（5年目以上）とも、専門職としての能力の1つである統括管理についてキャリアラダーの評価項目に沿って研修項目・内容を検討した。キャリアラダーは、産業保健5分野（総括管理、労働衛生教育、健康管理、作業管理、作業環境管理）、組織人として能力、自己管理・自己啓発に関する能力の7つの要素からなりたっている。その中でも、キャリアラダー作成の段階で多くの先駆的活動をしている産業保健師から意見が出た“組織をみる力”“企業人としての能力”が新人期から重要であるということ根拠に、新人期もマスター期もそれらを研修の主軸において構成した。

本研究班の高齢労働者に対するポピュレーションアプローチを推進していく専門職として保健師の役割が重要になることから、研修の重みを組織全体への支援においた。

研修回数は、学びを深めるために継続した研修として3回コースとした。研修会は課題等の取り組みもあるため、約1ヶ月間隔で開催した。新人期は1回2日間、マスター期は1回1日間とした。また、研修会に参加しやすいように土日・祝日の開催とした。

3) キャリアラダー項目の自己評価および研修アンケート

新人期・マスター期（5年目以上）ともに、各回の研修開始時に各時期におけるラダー項目について、自己評価を知識レベル（4：とてもある、3：ある、2：あまりない、1：ない）と実践レベル（4：十分にできている、3：できている、2：あまりできていない、1：できていない）の4段階で行った。

各研修会の終了後に、研修内容の理解度につ

いて（4：とてもできた、3：できた、2：あまりできなかった、1：できなかった）と今後の活用について（4：十分にできる、3：できる、2：あまりできない、1：できない）の4段階でアンケートを行った。

倫理的配慮

研究結果をまとめるにあたり、個人が特定されないように匿名化をはかり個人情報を守り、個人が研究に参加することで不利益が生じないように十分に説明を行なった上で、研究前に各自同意書を取り倫理的配慮をおこなった。

C. 結果

1. 研修生の概要

新人期の参加者は、男性1名・女性5名、年齢は22歳～26歳、学歴は、全員大卒だった。6名のうち2名が看護師等としての勤務経験があった。6名のうち、女性1名が健診機関に所属し、残る5名が事業場所所属の保健師であった。この健診機関に所属していた保健師は、本人のみの希望で参加していたが、初回に参加して以降、職場の所属がかわり2回目以降参加できなくなった。よって、事業場所所属の保健師5名の結果で分析をおこなった。

マスター期の対象者は、全員が女性、年齢は25歳～37歳、学歴は大卒5名・大卒1名だった。6名のうち2名は看護師としての勤務経験があり、産業保健師経験年数は、5年目4名・6年目2名だった。5名の保健師が事業場所所属、1名が健診機関所属であった。

2. 研修会の日程・内容

新人期の研修は、9月20日(土)～21日(日)、10月25日(土)～26日(日)、12月6日(土)～7日(日)の6日間、37.5時間、マスター期(5年目)の研修は10月4日(土)、11月8日(土)、

12月23日(火)の3日間、22.5時間のスケジュールで開催した。

研修会参加費は無料とし、交通費のみを個人負担とした。

平成26年の日程と主な研修内容・研修方法は、新人期研修会プログラム(資料1)、マスター期研修会プログラム(資料2)の通りである。研修で使用した資料の一部は、資料3として添付した。

3. キャリアラダー自己評価

3回の研修会毎に、参加者にキャリアラダーに基づいた項目の到達度を評価するために、知識と実践状況について自己評価をしてもらった。新人期の自己評価(表1)、マスター期の自己評価(表2)の通りである。

新人期においては、知識ではどの項目も到達度に達していたが、実践の面では“保健事業計画の施策と立案”“有害業務への対応”“海外派遣労働者の健康管理”“感染症・食中毒対策”はスコアが2.0未満で、到達度に達していなかった。

マスター期においては、知識はどの項目においても到達度に達し、実践の面でも概ね到達レベルに達していたが、“有害業務に関連する体制やシステムなどを構築したり、改変できる”はスコアが2.0未満で、到達度に達していなかった。また、過重労働対策における“個別事例に対し、指導ができる”の実践において、3回目のスコアが下がっていた。

4. 研修会アンケート

毎回の研修会終了後に、研修会の内容の理解度と今後の活用度についてアンケートを行った。

新人期のアンケート結果（表3）、マスター期のアンケート結果（表4）の通りである。新人期は3回の研修とも概ね「理解できた」と答えており、「活用できる」と答えていた。唯一、「職場巡視と有害業務」に関しては、理解はできるが活用においてスコアが低くなっていた。

マスター期の研修においては、理解と活用において、全ての内容において高いスコアであった。

新人期、マスター期とも、アンケートの自由記載から研修会参加の満足度は大変高かった。新人期では、「参加してとてもよかった」「毎回とても楽しみで、明日からまた頑張ろうという気持ちになった」「他の企業の保健師と意見交換できたのもとてもよかった」「自分に足りないところがひとつひとつクリアなり、今後にむけてとても役にたった」などの意見があった。

マスター期では、「毎回充実した内容で、今後活かしたいと思う」「理論だけでなく、プレゼンやディスカッションの企画が多く、本当に学びが多く刺激的だった」「自分の強みと弱みに気づき、今後の課題やトレーニングすべきことがわかった」「産業保健師として企業にアプローチできること等、考えながら仕事をしたい」「倫理についても悩むことがあり、先生方の実践的なメッセージにはげまされた」「個別の支援から、どう会社全体に活かすか、より会社全体にアプローチする方法などたくさん吸収できた」「モチベーションアップにつながる内容だった」などの意見があった。

4. 研修プログラムの特徴

1) 新人期

産業保健の基礎的な知識を取り入れ、特に職場という組織をどう見ていくのかという点に重きをおいた。1回目終了後には自分が担当している職場の特徴をアセスメントし、健康課題を抽出していきる課題を出した。2回目終了時には、1回目にとらえた健康課題に対して、15分の健康教育を行う課題を出し、3回目の研修でそれを各自発表してもらった。その結果、1年目の保健師であったが、積極的にそれらに取り組み、想定した以上にレベルの高い健康教育を実施した。対象者が発表した健康教育の内容は、「生活習慣病予防」「禁煙対策」2件「メンタルヘルス対策」「糖尿病予防」「積極的傾聴」であった。また、3回を通して常に組織全体を捉える視点が備わっていた。さらに、ねらいの一つとしていた企業人の一員であるという意識も発言の多くに見られた。

2) マスター期

研修日の設定を1日にしていたため、主に演習を中心に研修を組み立てた。マスター期からリーダー期に向けて成長してもらうために、組織の問題を企業の上層部にどうそれを伝えていけばよいのか、解決の道筋を描きながら自律的に展開できることを主軸においた。

1回目では、ケースメソッドとしてメンタルヘルスの問題を個人だけではなく組織の問題として捉え、問題解決のために人事部や経営層へどう働きかければよいのか、どのような職種と連携していけばよいのかディスカッションをおこなった。1回目研修会終了時には課題として、自分が管轄している職場の組織的な問題を捉え、その解決方法を考えてくる課題を出し、

2 回目に各自発表し意見交換をおこなった。

2 回目研修会終了時には、各自が抽出した問題と解決策を安全衛生委員会でプレゼンテーションをする設定で課題を出し、3 回目研修会で実践演習をおこなった。

演習では、自分のケースを発表するだけでなく、他者の評価もおこなうことでさらに学びを深める工夫をおこなった。その際、“良い点”“改善点”をあげるようにし、つねに前向きに創造的に物事を考えるような訓練をおこなっていった。

D. 考察

1. 研修会参加の条件

新人期の研修において、当初 11 名が希望していたが実際は 6 名が参加にとどまった。参加しなかった対象者は、いずれも研修地が東京であるのに対し、地方の対象者は参加しなかった。また、初回参加した 6 名のうち 1 名は、職場の上司には研修会のことを告げずに参加していたが、初回研修後に所属が変わり、参加できなくなった。逆に、残り 5 名は研修会参加に対し、いずれも職場の上司の勧めや了解を得た者ばかりであった。このことから、研修会においては、開催場所の利便性、上司の同意がある方が参加しやすいと言える。新人保健師が土日の開催といえども、交通費など自費を払い個人の裁量だけで参加することは困難であると考えられる。

一方、マスター期の研修は毎回 1 日開催ということもあり、特に支障はみられなかった。

2. 研修プログラムについて

1) 時期・時間

今回は 9 月から研修を開始したが、新人期においては、新人としての社内研修も終わり、仕事が少し見えたところでの実施であったことから、時期としては妥当であったと思われる。

新人期・マスター期とも日数・時間と適切であったと考える。しかし、演習やディスカッション、プレゼンなどを考えると、両方とも 6 名のサイズでちょうどよく、もし、この人数を超えるようであれば、時間や形式などを検討する必要があると思われる。例えば、グループワークは 6 名のサイズにして、数グループを形成し、そこにファシリテーターが入り考えを共有していく仕組みなどが求められる。

2) カリキュラム内容・構成

新人期

参加者の学びの様子や参加への積極性などから、カリキュラム内容も適切であったと思われる。ねらいとしていた組織をみる力は新人期の対象者にどれだけ理解してもらえるかが気になるころではあったが、思った以上に理解できていた。

新人期の実践面で“保健事業計画の施策と立案”のスコアが低かったことについては、キャリアラダーとしては、新人期では具体的な保健事業計画の施策と立案という PDCA について説明できればよいのであるが、参加者は「具体的な施策を説明できる」と、解釈し自己評価を厳しくしたのではないと思われる。実際、研修の中の演習では、産業保健師が健康課題から PDCA をまわして事業展開することを十分理解していた。

また、“海外派遣労働者の健康管理”“感染症・食中毒対策”のスコアが低かった点については、本研修は取り扱っていなかったからだと推察される。これらの内容は、健康危機管理対策としてふれておく必要はあるように思う。

研修会毎のアンケートで、“職場巡視と有害業務”に関しては、理解はできるが活用においてスコアが低かった点については、参加者の中には、職場で有害業務をほとんど扱っていない者がいたためと考えられる。

新人期の対象者に対し、先駆的な活動をしている産業保健師の話を聞き意見交換をした時間があったが、皆、感銘を受けていた。自分が所属する職場だけでなく、第三者の好ましいキャリアモデルに接することは、自分達のキャリアを開発創造する上でとても大切なことと思われた。

マスター期

マスター期においても、概ねキャリアラダー項目の到達レベルに達しており、カリキュラムとしては妥当であったと思われる。

マスター期の“有害業務に関連する体制やシステムなどを構築したり、改変できる”はスコアが2.0未満で、到達度に達していなかった点は、新人期同様、自職場に有害業務がない参加者がいたためと思われる。また、過重労働対策における“個別事例に対し、指導ができる”の実践において、3回目のスコアが下がっていたのは、講義を聞くことで単に個別の健康支援だけではなく、労働環境の改善といった組織や経営にもかかわっていく難しさを理解したためと思われる。

産業保健師就業実態調査研究事業（五十嵐ら、2008）²⁾では、産業保健師が業務を行っていく上で「生産性の向上への寄与」「労働能力の向上への寄与」「環境への寄与」「安全配慮義務やリスクマネジメント」「起業防衛への寄与」の認識が低いという知見が示されている。この結果を受けて、日本看護協会の10年目の産業保健師を対象とした産業保健師中堅期リーダー研修³⁾においては、「職場における健康課題や体制づくりに関するマネジメントについての組織内外に提言する能力」「健康づくりの視点からの、経営方針・CSRに関する提言能力」などがコアになっている。よって、新人期の時から、そのような視点をもって仕事をしていくこ

とを意識付けしていくことは、産業保健師としての成長に大きく幅が広がっていくと予想される。また、産業保健師の総括管理的な視点を、組織や事業場全体の健康をつねに考えていくことを入社後から考えていくことはキャリア育成に対し重要なことと考える。

このことはマスター期研修からも同じことが言える。マスター期は産業保健師としてひとりの仕事が自律して遂行されている時期であるが、それだけに、事業場全体を動かすにはどうしたらよいか、壁にあたる時期でもある。事実、ディスカッションからもそれらを多く聞かれたが、そのような時期にこのような研修会があると、自分の仕事を客観的に見つめなおすことができ、モチベーションアップにもつながり、研修会の意義は深かったように思われる。

今回の参加者は大企業の産業保健体制が整っている産業保健師ばかりであり、研修会毎に想定した以上の成長がみられた。しかし、多様な職場で働く産業保健師に対し、これらの研修モデルがそのまま活用できるかは、今後事例を増やす必要がある。しかし、今回唯一健診機関に所属する産業保健師が参加していたが、

「実際の業務の幅はある程度決まっていますが、本来あるべき産業保健師像をしっかりと持つことにより、視点が拡大しスキルがあがる」と述べていたことから、産業保健師一人一人がキャリアラダーを意識しながら、自己研鑽していくことはとても重要であると考えます。

今後は参加者のその後の成長を再度自己評価するとともに、上司からの評価もとり、研修モデルの検証をおこなっていきたい。

F. 引用・参考文献

1) 五十嵐千代、三好智美、荒木田美香子；産業保健師等の継続教育に関する研究, 産業保健

分野のポピュレーションアプローチ推進手法
の開発と産業保健師棟の継続教育に関する研
究,厚生労働科学研究費補助金労働安全衛生総
合研究事業,2014

2) 五十嵐千代 他; 産業保健師就業実態調査
研究事業, 地域保健総合推進事業
日本公衆衛生協会, 2008

3) 畑中純子、五十嵐千代 他; 中堅期保健師
コンサルテーションプログラム(産業分野) 検
討委員会, 厚生労働省先駆的保健活動交流推進
事業, 2011

G. 研究発表

平成 27 年 5 月の日本産業衛生学会にては発
表予定。すでに採択済み。